
素直になりきれなくて

ミュキハルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になりきれなくて

【Nコード】

N7288Q

【作者名】

ミユキハルト

【あらすじ】

原作・柴田よしき『聖なる黑夜』の二次創作です。

時系列は『ガラスの蝶々』と『私立探偵・麻生龍太郎』の間です。

麻生が部屋を取り払う前。

練は最後の見納めに、夜、その場所を訪れる。

何気ない会話（前書き）

原作ファンになって衝動的に書いてしまいました。

原作を知らない方には話がわからない部分も多々あると思いますが、ご了承ください。

できるだけ原作に忠実に書いたつもりですが、基本的には私の解釈です。

第8回以外、練ちゃん視点で話は進んでいきます。

何気ない会話

龍太郎はよく練の髪を撫でる。

他人の髪を撫でるのが好きなのか。それとも、練の髪だから好んで撫でるのか。

どちらにしろ、練はそのやさしさが好きだった。

龍太郎の手。その大きさ。その体温。

そつと触れられるだけで、じんわりと体の中が熱くなる。安心してしまう。

その瞬間だけ、自分は無防備になる。無意識に武装する、心の緊張を解く。

龍太郎の前でだけ裸になる自分を、彼は果たして気づいているのだろうか？

~~~~~

練は料理をするのが好きだった。

ガチャリ、と鍵穴が回って玄関の扉がひらく音が聞こえた。

「また不法侵入したのか、おまえ」

呆れた声が廊下を歩いてくる。

「お帰り」

練が台所から顔を出したとき、龍太郎は夕刊をソファの上に放り出していた。

「保釈か」

顔も向けずに龍太郎は問うた。

「うん。もうすぐあんだ、引越すんでしょ？」

「だから来たのか」

「見納めにね」

「ここに、何か思い出があるわけじゃないだろう」  
「そうでもないぜ」

練はわざと意味深な間をあけた。

龍太郎は、怪訝そうにしながらもやつと練を見た。

「……なんだ？」

「あんたが初めて俺を抱いた場所」

練は笑った。

「立派な思い出じゃない？」

「立派じゃないだろう」

「俺を犯したこと後悔してる？」

「練、俺は」

「ね、パスタ食べる？」

練は台所に戻った。

「今ちょうど、茹で上がったんだ」

~~~~~

肉のたっぷり入ったミートソースを、龍太郎は麺とうまく絡めて食べていた。

練はその口元を見つめていた。

赤く汚れていることを、今はなんとなく指摘しないでおいこうと思っ

った。
「あんたって食うの早いよね」

「昔からなんだ。学生の頃から変わらない」

「肝臓だけじゃなく、胃も悪くするぜ」

「同ジアル中が言っな。余計なお世話だ」

練は空になった龍太郎のグラスにワインを注いだ。

「でもそういう食べ方、見てて面白い」

見かけによらず大食漢。あの時から全然変わってない。

美味しそうに食べてくれるのは、やはり嬉しかった。

「おまえ、食欲ないのか？」

龍太郎が心配そうに問うた。

練は先ほどから食べる手を止めていた。

「違うよ。もしかしたら、あんたの分が足りないんじゃないかと思っ
つてさ」

自分より多めに皿に盛ったのに、龍太郎はペロリと平らげようと
していた。

練は「もし足りないのならば分けてあげようか」と、チラリとそ
んなことを考えていた。

龍太郎は首を横に振った。

「いや、ちょうどいい。俺のために多く作ってくれたんだろ？」

「うん」

「ありがとな」

龍太郎は時々、そういうことを顔色も変えずにサラリと言ってし
まう。

「それにしても、俺が人より大食いだって知ってたのか」

「見てればわかるよ」

その言葉に龍太郎は不思議そうな顔をしたが、別段気にしたよう
でもなかった。

練は何も言わずに自分の皿の残りを片付けることにした。

何気ない会話（後書き）

二次創作というものを、初めて書きました。

温かい目で読んでもらえると嬉しいです。

変化と不変（前書き）

食後の酒を飲みながら、練は麻生の心境の変化を思う。

変わらぬもののために変わるのは、何故か。

変化と不変

食後の酒は、さつき部屋で見つけたバーボンに決めた。

「おまえ、そんなもんどつから探し当てて来るんだ？」

どうやら部屋の主は、自分の酒の居場所を把握しきれていないらしい。

「さあ。そこにあつたから飲んでるだけ」

グラスは面倒だから二人で一つにした。

龍太郎が半分ほど呷った。

「ねえ、ここにあるものって引越しのときに捨てるの？」

「必要最低限のもの以外、ほとんどリサイクル業者に売る」

「ふうん」

練は何気なく部屋を眺めた。

わずか三DKの、こぢんまりとした空間。

掃除が行き届いているわけではなかったが、練はここが好きだった。

家らしい家。生活感があり、どこかほっと息をつける場所。

龍太郎の家。もつじき取り払う家。

家財道具のほとんどは、前妻との思い出の品。

龍太郎がずっと、捨てきれなかったもの。

玲子ともう完全に決別しようとしている。練はそう思った。

「それよりも、おまえ、こんなところにいていいのか」

龍太郎の声が、練を我に返らせた。

いきなりで話が見えなかった。

「どういう意味？」

「まだ終わってないんだろ？」

なるほど、と練は内心納得した。

龍太郎は警察官の顔に戻ってしまったのだ。

いや、「俺」は「ヤクザ」の見方に戻った、が正しいのか。

「梶原さん、しつこいからね」

「また、聴取受けるのか」

「明日。どつからあんなに別件とってくるのやら」

「おまえが危ないことばかりやっているからだろ。ヤクザから早く手を引け」

（ほら）

練はため息をついた。

「警察官」が龍太郎の一部であつたように、「ヤクザ」は自分の一部ではないのに。

ヤクザを憎むのはわかるが、だからと言ってなぜ、「俺」は「ヤクザ」は「俺のすべて」と解釈されなければならないのだろう。

龍太郎はヤクザを嫌う。ヤクザの練を嫌う。それなのに、

（俺と別れずに、あんたはあんたを変えることを決めた）

警部の職を辞してまで、龍太郎はこの関係を守ろうとした。

なのに、龍太郎自身がその意味を、解っていない。

「——俺、あんたのこと龍って呼んでいい？」

「人の話を真面目に聞く気はないのか」

「ちゃんと聞いているよ。でもセックスの最中、名前を呼べたほうがいいじゃん」

龍太郎は顔をしかめた。

「なあ、練——」

「ねえ、龍」

「なんだ？」

「……反応フツーすぎ」

龍太郎は長く息をついて、手を伸ばして練の頭を軽く揺さぶった。口元にはわずかに笑みが浮かんでいる。

仕方ないな、という顔だった。

「何を期待したんだか。ほんと小娘みたいな奴だな、おまえ」

（ま、いいか）

練は笑って、残りの酒を飲み干した。

龍太郎は数日後、警察を辞める。

その事について、練は何かを口にしようとは思わなかった。

龍太郎の決意。

それはすべて、自分と向き合うためのものだ、と、練は知っていた。

変化と不変（後書き）

実際は二人とも、もっと酒飲みなのに全然飲んでない（苦笑）

独白（前書き）

一人きりのとき。

目裏に浮かぶのは己の心。

独白

「シャワー浴びて来る」

龍太郎はバスタオルと着替えを持って浴室へ向かった。

くくく

練は和室の襖を開けた。

龍太郎が帰ってきたときに放り出していた上着やネクタイを拾い上げる。

「だから皺になるって言うてるのに」

ハンガーにかけながら、練は一人呟いた。

こういうことが気になって仕方ないのは、すべて誠一のせいだった。

龍太郎と違って、誠一はマメだった。

練は目を瞑り、深く息を吸って、ゆっくりと吐いた。

練の中で、誠一の実在はまだ完全に思い出になっ
ていなかった。
なるはずもなかった。

たといいくら時が経とうとも、この苦痛だけは、
薄まることはな
いだろう。

（俺が、誠一を忘れるなんて決してない）

穴は、胸にぽっかりと開いたまま。

誠一という自分の魂の一部はもう、永遠に還ってこない。

誠一を想うとき、同時に龍太郎を想う。二人を比較するわけでは
ない。

どちらのほうがどちらより。そんなことは関係ないのだ。

（俺は、誠一も、龍太郎も、愛している）

誠一は生き返らせようとしてくれた。けれどもうこの世にはいない。

龍太郎と一緒に墮ちようとしている。けれどそれは単純なことではない。

龍太郎は負い目を感じている。償おうとしている。
過去の冤罪事件。

それは確実に、龍太郎の中にも大きな傷跡を残していた。
（もし俺を逮捕するのが龍太郎でなかったら、何かが違っていたか？）

いや、そんなのは無意味だ。考えるだけ無駄だ。
起きた過去は変えられない。

練は拳を強く握りしめた。悔しかった。悲しかった。

（どうして、また出会ってしまったんだろう？）

誠一が殺されて、その事件を担当することになったのが龍太郎だった。

とんだ巡り合わせだと思った。カミサマから唐突に、甘い毒の接吻を受けたかのような衝撃だった。

龍太郎と再会するまでは、ただ彼を「憎んでいる」と思うだけでよかった。いや、実際憎かったのだ。あの夏の日、人生は一変したのだから。

でも、完全というほど憎みきれなかったのも事実だった。
龍太郎は憎い存在であり、懐かしい存在だったのだ。

（龍太郎は何も知らない）

同じ蝉の声でも、あの夏の記憶は龍太郎のものと明らかに違う。
再会して、それを腹立たしいとも思った。

龍太郎はあの夏に縛られていなかった。完全に忘れていた。十年間、何も思い出さなかった。

（龍太郎は俺を忘れていた。あんなことをしておいて）

でも、その違いは仕方ないものだというのがわかっていた。

龍太郎と違って、自分はあの時すでに、確実な感情を抱いていたのだから。

龍太郎は何も知らない。

あの日、玄関にいる龍太郎を見て、自分がどれだけ驚き目を疑ったか。

暑苦しい取調室の中で使った龍太郎の魔法が、ずっと効き続けているなんて、誰が信じる？

疲労の蓄積した頭の中に響く蝉の声。

毒の接吻。一瞬の過ち——甘い魔法。

龍太郎は何も知らない。

忘れてるし、もしあの夏を覚えていたとしても、自分にはそれ以前の記憶がある。

あの取調室の前。あの玄関の前。

もっと前に、もうすでに出会っていたことなど、きっと龍太郎は覚えていない。

だから。

そう、だから……龍太郎は、何も悪くないのだ。

（ただ一方的に、龍太郎の知らないところで俺が思い続けていただけ）

誠一に愛されながらも、誠一を愛していても、龍太郎を忘れなかった。忘れられなかった。

だから誠一は嫉妬した。

秘密裏に、龍太郎を殺そうとまでした。

誠一はちゃんと見抜いていたんだ。

（俺の憎しみが、龍太郎への愛情の裏返しであることを……）

「……女々しいな」

この場所で、この龍太郎の部屋で彼を殺すのを諦めたとき、もう心を偽るのはやめにしようと思った。

好きだったのだ。ずっと。

ずっと、前から。

「俺は、あんたのことがずっと——……」

練は目を閉じた。

そっと、浴室から響くシャワーの水音に耳を傾けた。

十年も前に好きになった人物が、今この場所にいることを。その実感を、ただ胸の中、心の奥で、じっと噛み締めた。

独白（後書き）

思い切り私的解釈です（汗）
文章が拙くてごめんなさい！

練は、自分を線路から救い出した誠一を一生忘れないと思うんです。

そして龍太郎に対する想い、それがいつ芽生えたものなのか。

練はきっと、そのことは胸に秘めたままでは言わないんじゃないかと思うんですね……。

蝉の声（前書き）

あの日の記憶。

蝉の声と彼の体温。

魔法が解かれることはない。

蝉の声

「……また寝てる」

龍太郎の次にシャワーを浴びて戻ってくると、彼はもう布団の上で眠っていた。

練はため息をついた。

「あんたって隙だらけだよな」

練は体がくっつかないように龍太郎の上に跨った。覆いかぶさるように両手を突いて、静かに上体を傾ける。

息を止めて顔を近づける。そのまま唇を重ねようとして、ふと動きを止めた。

耳の奥であの夏の蝉が鳴いていた。

（思い出させてみようか？）

練は思いついた考えを行動に移した。

唇を龍太郎の首筋に当てる。そしてゆっくりと移動して、今度は鼻先を彼の顎につける。

そのまま上へ鼻先でなぞるように動くと、チクリと痛みが走った。髭だ。あのときと同じ。

鼻先が唇に触れた。ほんの数秒、練はそこから動かなかった。

魔法だ。

あのとき、次に動いたのは龍太郎だった。

鼻先同士をくっつけて数秒止まって。

練は唇をそつと重ねた。あの一瞬以上の、時間と想いをかけて。

「レン？」

龍太郎が薄く目を開いた。

「おまえ今……」

目の焦点が合っていないようだった。

天井に視線を彷徨わせる姿を、練はただじっと見守った。

しばらくして龍太郎と瞳が合った。

「……頭の中で蝉が鳴いていた」

龍太郎は小さく呟いた。

「夢を見ていたような気がするんだ。おまえの匂いが――」

彼は、しかし言葉を切って練を凝視した。

「おまえ何で裸なんだ？」

（思い出さない、か）

練はため息をついた。

「見てわかんない？ 今からあんたをまた襲おうと思ってさ
いじわるく笑い、悪びれもせず言った。」

「前と同じようにぐっすり寝ていたものだから」

「ちゃんと服を着る。風邪引くぞ」

バカ。察しろよ。

「俺、あんたとこのまましたいんだけど」

「寝かせてくれ」

「嫌だ。俺もう湯冷めして寒いんだ」

「だから服を」

練は龍太郎の言葉を遮るように舌先を彼の口内に滑り込ませた。
思いのまま絡めて貪る。深く。熱く。

そうすることで、龍太郎もちゃんと反応してくれるのだから堪らない。

だからあんたはズルいんだ。

もつと、もつと。求めたくなる。

練は肩で息をしながら笑った。

「ほら、あんたのもう勃ってんじゃん」

そう言つて首筋に口づける。

「ね、あつためてよ」

自分でも甘えた声だなと思った。自然と出るのだから仕方ない。

龍太郎は諦めたように息をついて、練の髪を撫でた。

やさしく。

やさしく。

蝉の声（後書き）

……原作には、

麻生が「あのとき」のことを完全に思い出したと示すシーンはないのですが、

なんとなく思い出しているんじゃないかと思うんだ、言葉にしてい
ないだけで。

麻生って、無意識に本当の気持ちを抑えてますからね。

だからいつまで経っても煮え切らない……（泣）

溢れて止まらない（前書き）

「やさしさ」の裏にあるものは何だろう。

愛、それとも……。

愛するがゆえに、不安はより募っていく。

溢れて止まらない

龍太郎はいつもやさしい。無理強いはいしない。

龍太郎は自分からキスをしない。
好きだと囁いてはくれない。

ただ、撫でてくれる。

髪を。頬を。背中を。腿を。

やさしく、そっと、撫でてくれる。

時々それが、無性に泣けてくる。

くくく

練は龍太郎の胸に頭を置いた。

彼の鼓動を聞く。熱を感じる。

髪がゆつくりと撫でられている。

「俺の髪って弄りやすい？」

「そうだな」

「いつもこんなふうに撫でるの？」

「何が」

「俺じゃなくてもこんなふうに撫でる？」

龍太郎の手が止まった。

「どうだろうな。別に意識していない。嫌なのか？」

練は首を横に振った。小声で呟く。

「好きだよ。あんたの手、好き。もっと撫でてよ」

龍太郎は驚いた顔をした。

「……練、あまりそういうことは言っな」

「なんで？ いいじゃん、たまには」

体を起こして、練は龍太郎を見た。

気がつくと、頭の後ろに龍太郎の手があった。

動きを封じるようにその力は強い。

唇が塞がっていた。

龍太郎は片手で上体を起こして、練にキスをした。

「抑えが利かなくなる」

一瞬、らしいなと思った。でも次の瞬間には、練はふてくされた。

「そんなのお互い様だろ」

少し噛みつくように、練は龍太郎の唇を吸った。

くくく

龍太郎は言葉で愛を囁かない。

でも、態度で示してくれる。

たぶん、それは愛なのだろうと、練は自分に言い聞かせる。

本当は、慣れていない。

こんなにやさしくされるのは。

だから、言葉で言ってほしい。

思い込みはイヤだ。

でも、愛だなんて、囁かれたことない。

誠一だって言わなかった。

でも感じることはできた。

自分を愛してくれていると。

じゃあ、あんたは？

償いを、愛とは呼ばない。

憎しみを、愛とは言わない。

同情は、愛じゃない。

あんたのやさしさは、こわい。

溢れて止まらない（後書き）

麻生が自分から、というシーンを書きたかったんです。

あと、練に「好き」という言葉を言わせたかった……！

『素直になりきれなくて』という作品名ですが、

原作よりは相手への気持ちに正直になってほしくて書きました。

ナミダ流れて（前書き）

「泣き虫」だと彼は言う。

愛しさと切なさに、練は涙を流す。

ナミダ流れて

座った体勢で抱き合う。

体が密着する。

龍太郎の汗の匂い。自分の甘い匂い。

練は龍太郎の肩に顔を伏せていた。

「練」

龍太郎は、突然動きを止めた。

「どうした？　つらいか？」

練は無意識に泣いていた。

内心驚いたが、どうして泣いているのかは悟られないように首を振った。

「あんた、人泣かせるの上手すぎ」

「話を逸らすな」

練は、龍太郎の耳元で甘く囁いた。

「今いいとこだったのに。早く続きしてよ」

「おい、練」

「興奮して泣いただけ」

「嘘だ」

龍太郎は体を離し、練の顔を覗き込んだ。

「違うだろ。どうして嘘をつく？」

練は目を細めた。

（だから、変なところで確信もつなよ）

「……あんたつてずるいな。そうやって人を傷つける」
「何か、悪いことしたか」

練は、ふつと笑った。

泣き笑いに見えるだろうな、と自分でも思った。

「あんたは鈍感すぎるんだよ。それが無性に腹が立つ」

龍太郎の手が頬を撫でる。

練は、彼の親指が、どうしようもなく伝った涙を拭い取るのを感じた。

「気が付かなくていいものには気が付いて、気づいてほしいことは気づかない」

「練」

「わかってるよ。それがあんただ。これは俺の我儘だ。だから気づいてほしくなかった。あんたは気づかなくていいんだよ」

声が震えた。みつともない。

こんなこと、言うつもりなんてなかったのに。

閉じた瞼の上にやわらかい熱を感じた。

龍太郎は練の瞼にそつと唇を当てていた。

「練、言ってくれないか。情けないが、俺には何がおまえを傷つけたのかわからないんだ」

練はじつと龍太郎の瞳を見つめた。

少し躊躇ったが、言わなければいけない、そう思った。

「……俺にはわからないんだ。あんたがどうして、こんなにやさしく俺を抱いてくれているのか。俺を、殺したいんじゃないの？」

龍太郎への復讐として、練は彼が愛した玲子を貶めた。

離婚の原因は練にはない。でも、そのきっかけを作ってしまった。

龍太郎は静かに首を振った。

「おまえは俺を殺さなかった。俺はおまえを殺せない」

「どうして？」

「理由なんてあるか。じゃあおまえは、どうして俺を殺さない？」

「殺せないから」

「同じことだろう」

「同じじゃない」

「練。俺は、おまえを線路に寝かせた張本人だ。おまえの人生を歪めた男だ。俺にはおまえを殺せない。俺は一度、おまえを死に追いやった」

「そんなの関係ないだろ。あんたは俺に対する憎しみを抑えているだけだ。俺はあんたの女房を騙した！」

語気を荒げた練に、龍太郎の瞼がピクリと震えて反応した。

「……ああ、確かにおまえが憎いさ。でもな、もうどうしようもないんだ！」

突然、龍太郎は激しく練に口づけた。

そのまま押し倒して、練の脚を肩にかけて動きを再開する。

練の息が上がる。内側から生じた熱が四肢を絡めとる。

龍太郎の唇が練の首筋を舐めた。頬と頬が触れて、耳元に息がかかる。

「おまえを愛してる。それが、答えにはならないか」

告白。ずっと聞きたかった言葉。

「……似合わないんじゃないか、なかったのかよ」

「似合わないさ。でも、それしか言葉がない」

龍太郎はまた動きを止めた。

練が目を開くと視線が合った。

「なあ、練。やめにしないか。俺たちの関係は複雑すぎるんだ。行

「為も満足にできやしない」

「逃げるの」

「そうじゃない。素直になるんだ。今の気持ちに」

「今の気持ちって」

「また言わせる気か」

練は龍太郎の唇に指を当てた。そして、やさしく囁く。

「言って」

龍太郎は笑みを浮かべた。

「馬鹿野郎。そういうのは苦手だと言っただろう」

顔が近づいた。それはやさしい唇だった。

ころん、と涙が目尻を伝った。

ほら、無防備になってる。

あんただけなんだぜ。こんな自分を抱けるのは。

こんな弱い自分を、抱いてほしいと思うのは。

あんたは、気づいてないんだろうな。

「手、背中に回していい？」

「ああ」

「来て、龍」

もっと、深く、俺を抱いて――。

ナミダ流れて（後書き）

こついう話、実際の2人は避けるんだろうなー、と客観的に思っ
ちやいます。

「憎い」と本心をさらすことも、
でもそれ以上に「愛している」と口にすることも、できない関係…
…。

だからこそこのシーンを書いたのですが、やっぱりつらいなー。
オリジナルで読みたいです（泣）

今も確かな存在（前書き）

初恋は終わったはずだった。

今も確かな存在

目を開けると、練は龍太郎の腕の中にいた。

いつの間にか、髪を撫でられてるうちに眠ってしまったらしい。

「いびき……もろ、おっさん」

練は笑って、仰向けに眠る龍太郎の髪を弄った。

「……まさかこういう関係になるなんて、あのときは夢にも思ってたかったな」

十年前の夏。

左手薬指に光る指輪を見て、初恋は終わったんだと思った。

片思い。龍太郎が、バイト先の店に来るだけで嬉しかった。

あのときは、見ているだけでよかった。言葉を交わせればラッキーだった。

フツと、練は自嘲気味に笑った。

「中学の女子かよ、俺は」

龍太郎は知らない。通っていたロック喫茶に自分がいたことを。

覚えているはずがない。まともに視線が合ったのはたった一度だけ。

まともな会話だって、できなかったのだから。

「未来なんて悩むほうが馬鹿げてる」

思ったとおりの未来なんてない。

思い描いた未来は訪れなかった。

結局、今を生きるしかないのだ。

不思議なものだと思う。破滅を望んでいるはずなのに、もう何も期待していないはずなのに、龍太郎の熱を中で感じているときだけ

抑えられなくなる。

生への渴望。

誠一の後を追おうと思った自分なのに。

時間よ、止まれと思う。

望んだ未来が訪れないなら、せめて今を止めて。

何も考えずに、この想いに素直になって、ただ身を委ねていたい。

「好きだよ。俺は、あんたが好きだ」

突然、龍太郎の手が伸びた。

ぎゅっと頭を抱えられて、練は息を詰めて微動だにできなかった。

寝息が聞こえた。

「……寝返り、ね」

横向きに抱かれて、練は龍太郎の胸に鼻を押し当てた。

あったかい。

ゆっくりと目を閉じた。

しばらく、このままでもいいと思った。

離れたくなかった。

今も確かな存在（後書き）

練は、龍太郎にいくつ言葉を隠しているのかな、と試してみたり。

朝、暫しの別れ（前書き）

言葉の矛盾。

想いはあれど、距離はまだ埋められない。

朝、暫しの別れ

夢の中で、確かに温もりを感じていた。

体がふわふわと浮遊しても、抱きとめてくれる存在があったから。

指が空を彷徨った。

麻生は卵の匂いに目を覚ました。

台所に出ると、練が朝食を作っていた。

「おはよ、いびきのおっさん」

「……うるさかったか」

「別に」

練は笑った。

「あと少しで用意できるから、シャワー早く済ませてきてよね」

~~~~~

テーブルにきれいに並べられたメニューを見て、一瞬自分が今家にいることを忘れた麻生だった。

オムレツ。サラダ。ロールパン。ブラックコーヒー。

「……きつちりしてるな」

別にトースト一枚でもいいのに。

「何か言った？」

「いや。旨そうだな」

麻生はいい匂いのするオムレツを一口に切ってぱくりと食べた。

「どう？」

「ふわふわだ」

手料理でこれを食べられるのは贅沢なんじゃないだろうか。

「旨い」

「これも皐月ねえさんに教わったんだ」

子供のように得意げに笑う練に、麻生は顔を綻ばせた。

「あの人は本当に料理上手だな」

「うん。あ、そのロールパンどう？」

「旨いな」

「俺の行きつけの店で買ったんだ」

「高いんだろ？」

「そうでもないぜ。今度、連れてってやるよ」

「おまえ、もつとちゃんと食べる。次、いつ出てくるかわからないんだからな」

「うわ、もう犯罪者扱いかよ」

練はため息をついた。

麻生は笑った。

「正直に言うんだぞ。少しは拘置期間が短くなる」

「ひでえおっさんだな、ったく。俺は何もやってねえよ」

〃〃〃

きつちり皿の後片付けも済ませて、練は無言で玄関に向かおうとした。

麻生は咄嗟にその腕を掴んだ。

「なに？」

「いや」

掴んだ方がいいが、自分がなぜそうした行動をとったのかわからなかった。

「勝手に手が動いた」

「なんだそれ」

練は笑った。

「あんたらしいよな」

じつと練は麻生を見つめた。

「……なんか言えば？」

麻生は開きかけた唇を閉じた。言つべき言葉が見つからなかった。代わりに、練の体を抱き寄せた。

そのやわらかな髪を頬で確かめるようにして、唇を首筋に埋めた。

「リップサービスもなしなんだ？」

練はそつと息をついた。

「キスして」

長い腕が背中に回される。

「それくらいいいだろ。当分お預けになっちゃうんだから」

麻生は練の前髪を右手で撫で、額に唇を当て、それを少しずつ下へずらしていった。

瞼、頬、鼻。

指を髪に差し込んで、静かに唇を重ねた。

「あんたってやっぱり、やさすぎるよ」

麻生はぽんぽんと練の背中を撫でていた。

「おまえには少し物足りないか？」

麻生の肩の上で練はケラケラと笑った。

「あんたにそういうの、求めちゃいねえよ」

ゆつくりと練は身を離れた。

「浮気すんなよ」

「しないよ」

練はわずかに笑みを浮かべ、扉の向こうに消えた。

扉の閉まる音が、やけに重たく耳に響いた。

一人、部屋の中で麻生は掌を見つめた。  
そこに残る温かさ。その感触。

夢の中であって、今、現実にはないもの。  
自分は、無意識に求めている。

「今の気持ちに素直になる、か」  
麻生は笑った。

昨夜の言葉に嘘はなかったが、少し矛盾している自分を自覚せねばならなかった。

胸中に渦巻く複雑な想いを、麻生は目を閉じて今はただ、持て余した。

## 朝、暫しの別れ（後書き）

「浮気すんなよ」「しないよ」

練の言葉に麻生が即答できるのは、たぶんそこだけなんだろうなと思っ  
て書きました。

キスはできるのに、言葉は言えない。

リップサービスをしないのは、それでは意味がないから。

互いに素直になりきれなくて……。

素直になるのは難しい。

互いに気持ちはあるのに簡単にはいかない。

だから切なくて……。

『聖なる黑夜』に出会えて本当によかったなと思います。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7288q/>

---

素直になりきれなくて

2011年10月8日17時54分発行